

9/30 (木)

読売(7刊)

海底地形で増幅も

サモア津波 第2、3波にも警戒必要

30日に南太平洋のサモア諸島で発生した津波では、日本時間朝に太平洋津波警報センター(ハワイ)が一度、警報を解除した後も、気象庁が警戒を緩めなかった。津波の伝わり方は海底の地形の影響を受け、特定

の方向だけに大きく押し寄せることもあるためだ。津波は、海底面が地震で突然、隆起したり沈降したりした時、そこから海面までの海水全体が巨大な塊となって動き、それが周囲に伝わっていく現象だ。こう

した波は、深い場所ほど速く伝わり、地形の影響を受ける。たとえば、遠浅の海岸などでは後ろから来る波が追いついてかぶさるような形となり、増幅される。東北大学災害制御研究センターの今村文彦教授(津

波工学)は「発生地点から直接来る第1波が到達した後も、西に向かった波がマリアナ海溝沿いにカーブして北上し、数時間たってから大きな波が到達する恐れがある」と指摘する。

と話す。津波のエネルギーは、表面だけがうねる通常の波に比べ、けた違いに大きい。高さがたとえ数十メートルの津波でも、決して侮れない。津波の高さが20メートルを超えると、流速も毎秒30メートルを超えることが多い。今村教授は「高さが50メートルを超えると、人や船舶が流されるなどの被害が出やすい。沿岸部では第2波、第3波にも注意してほしい」と語る。

実際、2006年11月に千島列島の地震で発生した津波は、日本で津波注意報が解除された後、東北地方に押し寄せて漁船が転覆するなどの被害が出た。今村教授は「今回も、半日程度は注意が必要だ」

と語る。津波のエネルギーは、表面だけがうねる通常の波に比べ、けた違いに大きい。高さがたとえ数十メートルの津波でも、決して侮れない。津波の高さが20メートルを超えると、流速も毎秒30メートルを超えることが多い。今村教授は「高さが50メートルを超えると、人や船舶が流されるなどの被害が出やすい。沿岸部では第2波、第3波にも注意してほしい」と語る。